

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

007/ダイ・アナザー・デイ

配給/20世紀フォックス(経東)映画会社

2003(平成15)年3月10日鑑賞

Data

監督:リー・タマホリ

出演:ピアース・ブロスナン/ハ
ル・ベリー/ロザムンド・バ
イク/トビー・スティーヴン
ス

👁️👁️ みどころ

007映画の20作目は1962年の第1作から40周年の作品だ。1960年代は米ソ冷戦の時代だから、007映画も真実味があったが、今は楽しく(?)スパイ映画を観る時代。本作品は少し趣向を変えてみたが、やっぱりジェームズ・ボンドはカッコいい。しかし、北朝鮮の動きや38度線の地雷源の爆発を本当に楽しく(?)観ていいのかな・・・

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<シリーズ20作目の登場>

ご存知、007シリーズの20作目にして40周年の記念作品が登場した。ジェームズ・ボンド役は初代のショーン・コネリーから5代目のピアース・ブロスナン。4度目のボンド役だ。

<ボンドガールの役は・・・>

「ボンドガール」役は、①『チョコレート』(2001年)で2002年度第74回アカデミー賞で、黒人初の主演女優賞を受賞したハル・ベリーと、②正統派イギリス美人の若手、ロザムンド・バイクの2人。

2人とも、第5作の『007は二度死ぬ』(1967年)で日本人初のボンドガールを演じた若林映子やその他のボンドガールのように、ベットでのお相手をつとめるお飾り的な役ではなく、「強いボンドガール」として登場する。当然(?)1人は味方として、そして1人は敵として。これも時代の変化か・・・。

<007映画の40年>

イアン・フレミングの小説『女王陛下の007』が、007シリーズ映画の第1作『007/ドクター・ノオ(007は殺しの番号)』として製作、公開されたのは、今から40年前の1962年。時はまさに米ソ冷戦の時代。だからこそ、イギリスの「00」という「殺しのライセンス」の番号を持つイギリスの「諜報部員(スパイ)」の存在やその活躍には現実味があった。そして現実にも第2作『007/ロシアより愛を込めて(007/危機一発)』が作られた1963年はケネディ大統領が暗殺された年だし、第3作『007/ゴールドフィンガー』(1964年)はソ連のフルシチョフ首相が失脚した年だ。以降2002年までの40年間よくも続いてきたものだ。もっとも、当初はイアン・フレミングの原作を生かしながらの作品だったが、17作目の『007/ゴールデンアイ』(1995年)以降は、ジェームズ・ボンドというキャラクターやそのブランドを「売り」にして、その時々々の社会情勢を見ながら「敵」を設定し、その敵に対して敢然と立ち向かい世界を救うという「ジェームズ・ボンド物語」を作り上げてきている。

<長続きの秘訣>

日本でもシリーズものの映画はたくさんある。先日の『新仁義なき戦い/謀殺』で紹介したヤクザ映画の系譜では、高橋英樹の『男の紋章』シリーズ、高倉健の『網走番外地』シリーズや『昭和残侠伝』シリーズ、さらには藤純子の『緋牡丹博徒』シリーズがある。今続いているのは、バカバカしいけどとにかく楽しい『釣りバカ日誌』シリーズだ。しかし何ととっても日本のシリーズものの定番は、毎年盆と正月に封切られていた山田洋次監督と渥美清のコンビによる『寅さん』シリーズだ。何と全部で28年間49作にもなる超長寿シリーズだ。寅さん映画の「法則」はすべての日本人が知っているが、ジェームズ・ボンドの007シリーズにもいくつかの「法則」がある。

- ① ジェームズ・ボンドがかっこいいこと、
- ② ボンドガールが美人でスタイルのいいこと、は当然のことだし、
- ③ 敵が強けおひ強いのほどよい、
- ④ しかし最後はボンドが勝つ、
- ⑤ アクションとスピードが素晴らしい

ことも当然のことだ。

そして何ととっても興味深い「法則」はボンドガールに関する次の「法則」だ(パンフレットより引用)。すなわち

- ① 最初に登場するボンドガールはボンドの味方で、ストーリーの最初の方で殺されること(ボンドの腕の中で息絶えるのが望ましい)。
- ② 2番目のボンドガールは敵側の女性で、最終的にボンドの魅力に負けてしまうこと(できるならボンドを敵の手から救うのが望ましい)。
- ③ 3番目に登場するのは、再びボンド側の女性だが、事件が解決するまでボンドと結

ばれない設定にすること。

さらに、兵器開発担当者“Q”の研究室が作り出す秘密兵器の数々も、新作ごとの興味的だ。シリーズが長く続けばマンネリ化は避けられないものの、これらの「法則」を保ちながら常に斬新さを打ち出して20作まで続いてきたわけだ。

<20作目は・・・>

しかし20作目の『007/ダイ・アナザー・デイ』は、このような今までの007映画の法則を少し「軌道修正」している。

その第1は、北朝鮮を舞台とした冒頭のカッコいいアクションの後、残念ながらボンドは捕えられ、その結果14ヶ月に及ぶ拷問を受けるという設定。従って、ボンドは髭ボウボウ、髭ボウボウという、珍しくキタナイ姿を見せることになる。

第2は、ボンドガールが2人ともベットの相手だけではないということ。特にハル・ベリーは同じ諜報部員として活躍するカッコいい役割を存分に与えられており、しかも最後まで死なないという設定だ。このようなボンドガールの設定は今まであまり例がない。これはきっとアカデミー賞主演女優への配慮だろう・・・。

<総評>

『ダイ・アナザー・デイ』は舞台が北朝鮮。38度線に横たわる地雷源が次々と爆発していくという、何とも今の社会情勢、軍事情勢にタイミングを合わせた設定となっているが、所詮は危機一髪助かることは分かっている。だから心の底からハラハラドキドキすることはなく、ただただジェームズ・ボンドの活躍を楽しめばよい。

そう思って観ると、案外つまらないのでは・・・と思うと、そうでもない。冒頭のホバークラフトでのアクションから、終盤の氷の上でのカーアクションまで、とにかくスピードとスリルのあるアクションの連続はさすが迫力あり、結構楽しめる。もっとも「姿が消えてしまう車」という新兵器は、珍奇すぎてだんだんネタが尽きかけてきたのかなという感じが否定できないが・・・。

少し残念だったのは、同じボンドガールでも、ハル・ベリーのウエイトが大きすぎて若手の正統派美人のボンドガール、ロザムンド・バイクの活躍が少なかったこと。次回を期待しよう。

2003（平成15）年3月11日記